

## 恒常的状态を表す日本語動詞の語用論的分析\*

西田 光一

### 1. はじめに

本論では、日本語動詞の基本形の用法を語用論的に議論する。なかでも、次の例に見られる種類の基本形を議論する。以下、問題となる動詞には下線が引いてある。

- (1) 駒ヶ岳<平石町> 火口内には女岳の中央火口丘と爆発跡がみられる。火口壁の外側、男岳北方には阿弥陀池を挟んで寄生火山女目岳がそびえる。(地名)
- (2) 千手観音坐像(峰定寺) 久寿元年(1154)創建の峰定寺の本尊、、、丸顔が円勢風をよく継いで、円信作の可能性のある西大寺十一面観音像に似る。(美術)
- (3) スリランカの南西約700kmに浮かぶモルディブ共和国。南北に約750km、東西約120kmのエリアに26の環礁が浮かぶ。島は約1200もあり、世界屈指の美しいホワイトサンドビーチと極上の海に囲まれている。(現代)
- (4) 青山~表参道を歩く ハチの墓は青山墓地にある。ここは、地名の由来でもある青山家屋敷の跡地。岡本綺堂、尾崎紅葉、国木田独步、斎藤茂吉、、、吉田茂といった日本近代史に名を連ねる人々の墓が並ぶ。(東京)

この種の動詞の基本形(以下、ル形)は、主に書きことばで、特に事典、美術書、旅行ガイド等の見出し付解説文で使われ、恒常的状态を表す。この種のル形は、問題となる状態を写した写真と共によく使われる。例えば、(2)は、この千手観音坐像の写真に伴う解説文である。また、この種のル形は次のような歴史人物の紹介にも現れる。

- (5) 菊池序光(生没年不詳) 江戸時代後期の装剣金工。菊池序克にまなび、のちに養子となって菊池家2代目をつぐ。柳川派の手彫りにすぐれる。江戸神田にすむ。本姓は中山。通称は伊右衛門。(人名)

この文脈では、話し手(特に書き手)が当該状態について全ての知識を持ち、聞き手(特に

読み手)は話し手の発話に接して初めてその状態を知ることになる。(3)のように、この文脈でもテイル形が使われるが、ル形はこの文脈に特徴的に使われる。文脈の種類を選ばない点でテイル形は無標、文脈の種類を選ぶ点でル形は有標である。この有標のル形を恒常的状态を表す用法、または恒常性用法と呼ぶことにする。

本論では、2節で、恒常性用法のル形と日本語動詞アスペクトの先行研究の関連を論じる。3節では、問題のル形が生じる文脈を分析し、この用法を司る原則を提案する。4節では、この原則を他の用法のル形とテイル形に応用する。5節は結論である。

## 2. 先行研究

この節では、金田一(1950)以降の先行研究を再検討し、問題のル形の特徴をつかむ。この種のル形は、アスペクトとは別の意味でテイル形と対立をなすことが分かる。

### 2. 1. 状態を表す動詞の形式

金田一(1950)のアスペクト分類では、日本語には状態を表すのに必ずテイルを伴うとされる動詞がある。金田一は、この種の動詞を「第四種」と呼んで他の状態動詞、継続動詞、瞬間動詞と区別し、さらに金田一(1955)では形容詞に近いものとする。

(6) 県境に山がそびえている／親子で声が似ている

金田一(1950:49)は、「そびえる、似る」など「この種の動詞は、いつも「一テイル」の形で状態を表すのに用い、ただ「聳える」だけの単独の形で動作・作用を表すために用いることがないのを特色とする。「聳える」の意義は、「(一つの山が他の山に対して)高い状態を帯びる」の意であるが、「帯びる」と言ってしまうとは、以前低かったものが新たに高く成るようでもずい。他の山より高い状態にある、それを「いる」という概念と、もう一つXという概念とに分析して表わした、そのXが「聳える」である」という。また、金田一によれば、第四種の動詞は、それ自体では「状態の発端」を表すが、表される状態の方は変化せずに成立しており、発端の時点が問題とされないため、これらの動詞を使う時はテイルをつけて状態の不変化を表すことになるとされる。

金田一の説を引き継ぎ、久野(1973:Ch.9)は日本語動詞に次の一般化を与えている。

(7) 動詞は語義で [+状態的] と [-状態的] に区別される。[+状態的] 動詞はル形で現在の状態を表し、[-状態的] 動詞はル形で未来時の動作、現在の習慣、普遍的動作を表す。[-状態的] 動詞が現在の状態を表すにはテイルを付ける。

例えば、「わかる」は [+ 状态的] 動詞のため、「太郎は日本語がわかる / \*わかっている」という対立が生じる。反対に、「来る」は [- 状态的] 動詞のため、「太郎は毎日ここに来る」は習慣を表す意味で使う。「住む」も [- 状态的] なので、現在の状態を表すには、「太郎はここに住む」とは言わず「太郎はここに住んでいる」とテイル形を使うとする。久野は、英語では live が単純現在形の John lives here. の形で現在の状態を表すように語彙的に [+ 状态的] 動詞が多いが、日本語では [+ 状态的] 動詞が「ある、できる、大きすぎる」など少数のものに限られると指摘する。久野の言い方では、第四種動詞も [- 状态的] なので、常にテイルが付くことになる。

しかし、(1) から (4) の例は、いずれもル形のままで現在の状態を表しており、習慣や普遍的動作とは違う。そのため、これらの例は、第四種動詞や [- 状态的] 動詞が現在の状態を表すにはテイルを付けるという一般化に当てはまらない。この一般化は、状態の表し方と発話の場面を考慮していないところに問題がある。第四種動詞とテイルの結びつきは、この種の動詞を含む発話が一定の想定の下で使われた結果だが、先行研究では問題の想定文脈が議論されていない。問題の想定をずらして文脈を整えると、テイルを付けないル形が現在の状態を表したり、後で見るように、常にテイルを伴うとされる動詞でも、ル形のままの用法が優先されることがあることが分かる。

## 2. 2. 動詞の分類と発話の場面

奥田 (1978) の指摘では次の 2 点が本論に関わる。第一に、アスペクト研究の対象は、ル形とテイル形が状況の時間的特徴において意味の違いをなす動詞に限られる。第二に、ル形は発話時と同時に進行するアクチュアルな現在を表すことができない。

第一の点は仁田 (1997:235-236) の動詞のアスペクト分類に引き継がれている。仁田は、「<動き>といったカテゴリーカルな語義を持つ動詞がアスペクトを分化させている。...、<状態 (- 動き) >といったカテゴリーカルな語義を持つ動詞は、アスペクトを分化させていない」とし、「アスペクトを持たない動詞」を次のように分類する。

(8) [A] テイル形を持たないもの：有る、居る、大きすぎる、...

[B] ル形・テイル形がアスペクト的対立をなさないもの：(例 あの服は彼に似合う/似合っている)、違う、存在する、...

[C] ル形を持たないもの：すぐれている、尖っている、似ている、...

(8) では、[A] が久野の [+ 状态的] 動詞に当たり、[C] が金田一の第四種動詞に当たる。しかし、[C] の動詞もル形のままで使うことがあるので、「ル形を持たない」という書き方は、「アスペクトを表す意味でル形を持たない」の意に解すべきである。[C] の動詞は「す

ぐれる」と「すぐれている」のようにル形とテイル形を備えていても、表される状況には時間的特徴の違いがなく、アスペクト研究の対象から外される。実際の用例で [C] にもル形とテイル形の両方があるとなると、仁田の [B] と [C] の分類は同じになるのだろうか。後述するように、[B] と [C] の動詞では、ル形とテイル形はアスペクトではなく、表される状況と聞き手の関係において違いがある。

(1) から (4) では、恒常的状态がル形により表される点が、ル形の用法として有標な理由である。例えば、(3) の「浮かぶ」は繰り返しのない状態を表し、「このボールは水に浮かぶ」のように繰り返しが可能な状況を表すのに使うル形とは性質が違う。これは、(8-C) で「尖っている」がル形を持たないとされる理由でもある。「この鉛筆は削ると、よく尖る」のように繰り返し可能な状況を表すのに「尖る」というル形を使うのは問題ないが、ある鉛筆の鋭角状の状態を聞き手に伝える場合は、「この鉛筆の先はよく尖る」というより「この鉛筆の先はよく尖っている」というだろう。しかし、恒常的状态を表すのにもル形を使う文脈がある。それが本論の分析対象である。

奥田の第二の点は、(1) から (4) にあるようなル形が表す状態の特徴を分析する上で重要である。これらの状態は現在も成立するものだが、発話時に基づくアクチュアルな現在ではない。逆にアクチュアルでない現在ならば、ル形のままで表すことができるという見込みが立つ。以下、アクチュアルでない現在について解説を加えていく。

先行研究で「第四種動詞には常にテイルを付けて使う」という場合、発話の場面に聞き手がいて、その発話により話し手と聞き手が同じ状況を指すことが想定されている。実際、この想定で第四種動詞を使うと、テイルを付けなくては容認されない。聞き手に状況を直示する場面で使うので、テイル形の文は文末にヨ・ネを付け、聞き手に確認を求めることができる。この点で、(8) の分類における [B] と [C] の動詞は対立する。[B] の動詞は、面前の聞き手と話し、文末にヨ・ネを付ける場合でも、ル形とテイル形の両方が使えるが、[C] の動詞はル形の文にこの種の終助詞が付かない。

(9) 県境に駒ヶ岳が(そびえている/\*そびえる)ヨ・ネ

(10) 君の作風は、以前の作風とここが(違う/違っている)ヨ・ネ

また、[C] の動詞は、テイル形には丁寧体のマスが結びつくが、ル形に丁寧体のマスが結びつかない。[B] の動詞は、ル形とテイル形の両方に丁寧体がある。

(11) 県境に駒ヶ岳が(そびえています/\*そびえます)

(12) 君の作風は、以前の作風と色調が(違えます/違っています)

[B] の動詞はル形とテイル形が区別なく使える。[C] の動詞はル形で使うことがあっても、それは動詞の活用表の多くの部分が欠落した用法であり、丁寧体や終助詞と結び付けるにはテイル形にしなければいけない。終助詞や丁寧体の欠落は、この種のル形が対面する聞き手に向けて使われないことの反映である。言い換えると、第四種動詞のテイル形とル形の対立には発話の場面における聞き手の在と不在が反映される。

発話の場面に聞き手がいて、その発話により話し手と聞き手が同じ状況を直示的に指すという想定では、ル形とテイル形はアスペクトの対立を示す。しかし、その想定からずれて、話し手と聞き手が別の場所において、聞き手は話し手が発話した状況を体験しないこともある。そのような文脈では、発話が表示状況はアクチュアルでなくなり、アスペクト上の制約を無化してル形とテイル形が使い分けられることになる。

最初に挙げたル形の用法は先行研究のアスペクト分析とは合致しないことが明らかになった。この種のル形にはアスペクトによらない説明方法が求められる。

### 2. 3. 属性表現

本論で扱うル形は、表される状況が恒常的という特徴がある。そのため、このル形の用法は、益岡・田窪 (1992:109) の言う「問題の事態 (状況) を時間の流れに位置づけることなく、人やものの属性を表現する」という用法に属すと考えられる。益岡・田窪は、属性表現のル形は説明文やト書きに特徴的な用法とし、(13) の例を挙げる。

(13) 鍋にバターを溶かし、ベーコンを入れてよく炒める。

(13) のような説明文は繰り返し可能な状況を表し、ここで問題とするル形は山や仏像の状態のように恒常性を表すという点で違う。だが、両者とも、いつが発話時で、どこが発話の場面かが問題にならず、常に同じ説明が成り立つ状況を表し、属性表現に該当する。(1) から (4) では、ル形が現在の状態を表すが、(5) は、菊池序光という個人に起きた時間の流れを見れば、明らかに過去の話である。しかし、ここでは現実の時間の流れから離れ、江戸時代後期の事実の一部に菊池序光の生涯と業績が恒常的にある状態が問題になる。史実として常に同じ説明が成り立つことを表すため、(5) のような例は歴史人物についての属性表現をなす。これらのル形の表現では、現実の時間の流れから離れて成り立つ状態、つまり、その状態の基となる属性が表される。

一方で、益岡・田窪 (1992:110) は「テイル形の表現は、時間的な限定が希薄になると、対象の属性を表す」とし、テイル形にも属性表現の用法があると指摘している。

(14) 鴨川は京都の街を流れている。

(15) 花子は少しやせている。

テイル形では、(14) のような例が「継続状態の表現から属性を表す表現に移行」したものとされ、(15) のような例が結果状態の表現から属性表現に移行したものとされる。

まとめると、第四種動詞のル形が属性表現をなすことは認められるにせよ、属性表現というだけではル形とテイル形を区別する決定打にならないことが分かる。

テイルと結びつく語形を備えた[-状态的]動詞でもテイルを付けずに恒常性を表すことがある。この場合、ル形のままを使う理由は、状況の性質には還元されず、むしろ話し手の聞き手に向けた表現上の工夫によると見るべきである。次節では文レベルから発話の場面に分析の視点を広げ、恒常性用法のル形は、発話の場面に不在の聞き手を念頭に置き、その聞き手に新情報を与えるときに使うことを指摘する。

### 3. 属性を表すル形とテイル形の意味の違い

この節では、田野村(1990)の言う「披瀝性」という概念を援用し、属性表現の文脈でもル形とテイル形には意味の違いがあることを示す。表された状況に聞き手がいるかないかという観点から、恒常性用法のル形が従う語用論の原則を明らかにする。

#### 3. 1. 披瀝性

田野村(1990:34-46)は、「ノダ、ノダス、ンダス(以下、ノダと総称)」などの用法を分析し、「[「ノダ」は、聞き手の知らないことがら、さらに言えば、単に知らないだけではなく、聞き手にとっては容易に知り得ない種類のことがらを表現するのに用いられることが多い]と指摘している。このノダの用法を田野村は「披瀝性」と呼ぶ。

(16) 日本語には「灯台もと暗し」ということわざが「あります/あるんです」が、私にもこのことわざ通りの経験があります。

(17) どうして休むの? 天気が「悪いんです/天気が悪いからです」。

田野村は、(16) では相手が「灯台もと暗し」を知っている場合は、「あります」を使い、相手がこのことわざを知らない場合は、ノダの披瀝性を發揮して「あるんです」を使うとしている。また、理由の説明に「からです」を使うと披瀝性の含意がないが、ノダを使うと披瀝性が問題になるとする。そのため、(17) では、2人の会話と同じ場所で行われる場合は、「からです」だけが使える。天気が悪いことは、話し手と同じ場所にいる聞き手も知っているはずなので、ノダを付けて理由を説明することができない。田野村によれば、長距離電話で

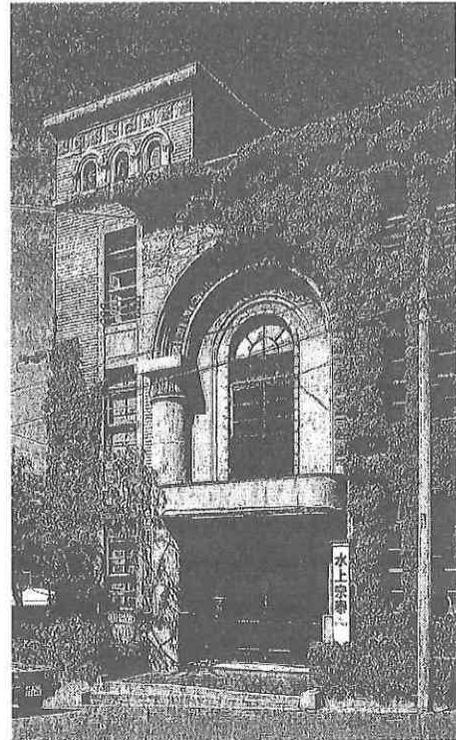
の会話のように、話し手のいる場所の天気聞き手に分からない状況では「天気が悪いんです」を理由の説明として使うことができる。天気のことでも、聞き手が容易に知りえないものであれば、ノダが使えるのである。

### 3. 2. 文脈の特殊化

田野村の披瀝性は、Prince (1992)、Ward and Birner (1995) が提唱する「Hearer-New」という談話上の情報構造と共通点がある。Princeらは、Hearer-Newの情報を導入するには専用の形式があり、その形式を使うと、発話の中で聞き手が新しく知る部分が表示されるとする。これは典型的に英語のthere構文で動詞の次の名詞句が担う情報のことである。例えば、There is a dog in the yard. と私が言う場合、私はa dogの部分がこの発話で聞き手が初めて知る情報だと想定することになる。話し手は自分と状況の関係だけでなく、自分の発話に接する聞き手と状況の関係も考慮して、ことばを使う。つまり、どこが聞き手が新しく知る価値のある情報かを伝える形式上の工夫をして話し手はことばを使う。披瀝性は、Hearer-Newに聞き手が情報を入手する際の難易度を加えた内容なので、この形式上の工夫をより精緻に把握するのに役立つ。

発話で表された状況がHearer-Newの情報構造を担ったり、聞き手にとって披瀝的なものになることは、属性表現の文脈にもある。田野村は披瀝性の含意をノダの特徴とするが、聞き手の知識に合わせて文脈を特殊化するという表現上の工夫は有標の文末形式の特徴として一般化できる。ここで有標の文末形式とは、文の基本的意味を変えずに、その文が使われる文脈を特殊化する文末形式のオプションのことである。

話し手がノダを使うと、その発話内容はあなたが容易に知りえないものだと聞き手に伝えるように文脈が特殊化する。恒常性のル形を使うと、また別の仕方で、一層の特殊化がかかった文脈ができる。次に小樽の昭和初期の建築、水上歯科医院の写真を見よう。(18)の解説を読んでから右の写真を見ると、解説のとおりベランダが位置し、左上側にアーチ窓が3つあり、この構成が本建築の特色を



(小樽の建築探訪)

なすことに気づくだろう。

- (18) 水上歯科医院 外観は、中央に玄関を構え、左に柱頭をのせた円柱を2階まで建ち上げ、アーチでベランダと玄関を取り囲む。3階建ての主屋左手を4層とし、アクセントに3つのアーチ窓が連続する。 (小樽の建築探訪)

しかし、この写真を見た人に明らかなことについては、テイル形は使えるが、(18) のようなル形は使わない。

- (19) 水上歯科医院 正面に看板と電柱が 立っている / ? 立つ。

テイル形は、指示対象が持つさまざまな属性を区別せずに表す。しかし、恒常性用法のル形に接すると、聞き手は自分の解釈を「問題の箇所は容易に知りえないが、問題の指示対象の重要な属性が表されたところだ」と特殊化するようになる。

披瀝性のノダと恒常性用法のル形には違いもある。まず、ノダの用法では、ノダを付加することで有標性を示すが、恒常性のル形では、テイルを欠落させることで有標性を示す。だが、一番の違いは、発話の場面における聞き手の在と不在にある。例えば、「私が反対した」という発話は独り言でも使えるが、「私が反対したのだ」とノダを付けた発話は面前の聞き手に向けて使う。一方、(9) や (11) で見たとおり、恒常性のル形は面前の聞き手に向けて使われない。この種のル形は、話し手が聞き手に直示しない文脈に適するため、対話で使われることがなく、主に書きことばで、話し手が不特定多数の聞き手（特に読み手）を設定し、披瀝的な解説をする文脈で使われる。

### 3. 3. 発話の場面にに基づく原則

恒常性用法のル形が適切に使える文脈では、動詞のアスペクト上の制約が無化する。話し手と聞き手が同じ時空間にいて同じ状況を直示的に指す発話の場면을対人コミュニケーションの文脈と呼ぶと、恒常性用法のル形は次の原則に従うことが分かる。

- (20) アスペクトは対人コミュニケーションの文脈において成立する時間表現である。そのため、聞き手の不在が保障された発話の場面では、アスペクト形式は無化するか、または非アスペクト的意味を表すのに転用される。

原則 (20) は、直示と Grice (1975) の「量の格率 (Maxim of Quantity)」に基づく。対人コミュニケーションの文脈では、その文脈で直示の基準となる時間の流れを聞き手と共有す

るため、話し手は状況の時間的特徴を動詞の形に反映させなくてはならない。つまり、量の格率の第一項「(その場のやり取りに) 必要とされるだけの情報をことばにせよ」に従い、話し手は状況の時間的特徴を聞き手に伝えるのに十分な情報を動詞の形で表す。一方、発話の場面に聞き手が不在だと、直示的に指すように促す相手がないので、話し手は直示の基準をことばで表す必要がない。話し手は量の格率の第二項「必要とされる以上の情報をことばにするな」に従い、動詞で状況の属性を表すだけでよくなる。

第四種動詞にテイルを付けた形では、対人コミュニケーションで聞き手にアクチュアルな状態を伝えるのにテイルが必要なので、発話の場面から聞き手が不在になると、量の格率の第二項により、話し手はテイルを欠落させて第四種動詞を使うことができる。第四種動詞が表す状況には時間的変化がないが、その動詞を使う発話の場面から聞き手が不在になると、動詞から時間伝達の意味とアスペクト形式が無化する。

### 3. 4. 聞き手の在と不在を示す文末形式

寺村(1984:126)が指摘するように、第四種動詞には「品定めの、性状規定的」な意味を表し、形容詞のように物事の様子や性質を表すものがある。「すぐれる、冷えびえとする」などである。しかし、このような品定めの意味の動詞も、歴史人物の紹介のような文脈では、ル形のままで使い、かつテイルを付けると容認度が落ちる。

(21) = (5) 菊池序光 江戸時代後期の装剣金工。、、、柳川派の手彫りに |すぐれる/?すぐれている|。江戸神田に |すむ/?すんでいる|。本姓は中山。

(22) 坂東しうか(初代)(1813 - 55) 江戸時代後期の歌舞伎役者。文化10年生まれ。容姿と口跡がよく、女方、所作事を |得意とする/?得意としている|。没後、5代坂東三津五郎を追贈された。安政2年3月6日死去。43歳。(人名)

この事実は原則(20)により次のように説明される。菊池序光や坂東しうかは明確に過去の人物である。このような過去の人物の属性についての文では、その文が表す状況に現在の聞き手は必ず不在であり、そのためアスペクト形式が無化して「すぐれる」が使われる。この文脈で「すぐれている、得意としている」を使うと、今も菊池序光や坂東しうかという人物が現存する感じを聞き手に与えてしまい、おかしい。

反対に、現在活躍中で、話し手と聞き手がともにアクチュアルな体験のある人物を紹介する文脈では、テイル形が問題なく使える。(22)のような文脈で、現在活躍中の5代目坂東玉三郎を紹介するならば、「女方を得意としている」と言うことになる。

原則(20)を具体化し、恒常性用法のル形が生じる文脈は、次の3条件を満たす。(i) 表された状況が恒常的性質を持つ。(ii) 当該状況について話し手が発話する場面に聞き手がい

ない。話し手は、聞き手と体験を共有せず、聞き手に知識を伝えるために発話する。(iii) 話し手は聞き手が容易には分からないことを表す。例えば、建築の解説のように、ことばで説明して初めて気がつくような特徴を表す。

日記のように聞き手が不在の場合でも、話し手が自分で自分に恒常的な状況を直示する文脈では、話し手は (i) を考慮するだけでよく、ル形ではなくテイル形を使う。しかし、(ii) が出てくると、表された状況は話し手と聞き手がアクチュアルに体験できるものではなくなる。ここにル形を使い、テイル形を使わない理由がある。さらに (iii) があると、有標の文末形式により、話し手が文脈を特殊化する意図が聞き手に伝わる。ここでもル形が優先される。したがって、恒常性用法のル形は、この3条件を総合的に満たす文脈でのみ使われる。この3条件が満たされているのに (i) だけを考慮して話し手がテイル形を使うと、動詞が時間伝達的意味を無化しきれず、聞き手にとってのアクチュアルな意味が生じ、(5) や (22) のような文脈では不自然になる。

#### 4. 原則 (20) が関わる他の事例

4節では原則 (20) と恒常性用法以外の用法のル形とテイル形の関係を論じる。まず、写真キャプションでのル形の用法を分析する。次に寺村 (1984) の言う「回顧的用法」のテイル形と連体修飾を取り上げ、今後の研究の方向を示唆することにする。

##### 4. 1. 写真キャプションにおける継続動詞のル形

金田一 (1950) のアスペクトに基づく動詞の4分類は、動詞とテイルの共起関係と、テイルと共起して表す意味の違いを基準としていた。第一に、テイルと共起せずに状態を表す動詞には、「ある、いる」などの語彙的な状態動詞がある。これが仁田の言う [A] の動詞である。第二に、「読む、書く」などの動詞は、ある時間内に継続する動作を表し、テイルを付けると「本を読んでいる」のように、継続中の動作が表される。第三に、「死ぬ、(電気が) 点く」などの動詞は瞬間に始まり、瞬間に終わる動作を表す。この種の動詞にテイルを付けると、「ランプが点いている」のように変化の結果の継続が表される。第四が「そびえる、すぐれる」の種類である (cf. 吉川 (1976))。

既に見たように、このような共起関係は、話し手と聞き手が同じ時空間にいて、話し手の発話内容を聞き手が体験できるという想定での発話について成り立つ。しかし、その想定から外れると、テイルを付けないオプションが使えるようになる。ここでは、この点で第四種動詞のル形と写真キャプションの継続動詞は共通することを示す。

(23) 八幡商一羽黒 12回裏羽黒2死三塁、暴投で生還し、抱き合って喜ぶ三走中島(8)と次打



者の吉野。横で八幡商の投手・上田が立ち尽くす

(河北新報)

左の写真に伴う (23) のキャプションでは、「横で八幡商の投手・上田が立ち尽くす」とある。立ち尽くす行為は一定の時間内に継続して行われる。そのため、この写真が写すもとの状況に話し手と聞き手がいるならば、話し手は金田一の第二分類に従い、「八幡商の投手が立ち尽くしているよ」とテイルを付けて発話し、聞き手もその状況を体験することになる。もとの状況には継続性があり、それを表す動詞にテイルを付けるが、写真になる

とテイルが切り取られる。原則 (20) により、アスペクト形式が無化するためである。

吉川 (1976) が指摘するように、継続動詞に付くテイルは動作・作用の継続を表し、第四種動詞に付くテイルは単なる状態を表す。このようにテイルが表す意味やテイルが付く動詞の種類は違うが、写真キャプションでの継続動詞のル形と恒常性用法のル形では、テイルが期待される場面でテイルがなくてよい理由に共通点がある。キャプションのル形にも写真が持つ時間的特徴と聞き手の不在が関わるからである。

ある指示対象の属性を表すことは、その指示対象について時間の流れで変わらない状態を表すことである。ある状況を写真に収めることは、その状況を一瞬にして全部というように人工的に時間の流れを断ち切ることである。つまり、写真は当該状況から、そこにもともとあった時間の流れをなくす手段である。ここで、当該状況からだけでなく、写真に収まった状況について語ることはからも時間伝達の意味がなくなる。写真も属性と同様に時間の流れのない世界で成り立つからである。

ある状況を写真に収め、それについて解説を与えるという話し手の行為では、その解説を受ける聞き手はもとの状況に不在である。写真キャプションは、聞き手がアクチュアルな状況を体験しないことが保障された文脈をなすため、写真について語ることは、原則 (20) に従い、アスペクト形式を無化して使うことができる。これが、キャプションでは継続動詞にテイルを付けずに継続的状況が表される理由である。

#### 4. 2. 回顧的用法のテイルと連体修飾のル形について

ここでは原則 (20) に関連して、回顧的用法のテイルと連体修飾のル形を議論する。

寺村 (1984) は (24) のような例にあるテイルを回顧的用法と呼ぶ。恒常性用法のル形で

は、テイルの欠落は聞き手の体験の欠落のサインをなす。反対に、もともとの状況に聞き手が不在でも、その状況を時間軸に沿って再現し、聞き手に追体験を求める文脈では、テイルが使われる。これが回顧的用法のテイルが生じる文脈である。

- (24) 武川さんは、三月八日の午前三時ごろ、親戚の家に行くといつて外出したまま行方不明となつて、三月十日午前七時半ごろ、死体となつて発見されている。

(寺村 (1984:134) の例文を引用)

寺村 (1984:135) の解説を引用すると、「回顧的なテイルは、、、過去の事件を改めて吟味し、その意義づけを行おうとする場面に」使われる。このテイルは表された状況の時間的特徴を示すものではない。むしろ、回顧的用法では、表されたもともとの状況に聞き手は必ず不在であり、このテイルは原則 (20) により、アスペクト形式が非アスペクトの意味に転用されたものと見ることができる。つまり、話し手が聞き手に過去の事件を今吟味するように促すための表現手段にテイルが転用されている。

回顧的用法のテイル形は、恒常性用法のル形・写真キャプションのル形と対をなす関係にある。後者では状況にはテイルを付ける要件があるが、不在の聞き手との関係を優先してテイルを付けずにル形を使う。反対に、前者では状況にはテイルを付ける要件がなく、むしろ過去時を表すタ形を使う要件があるが、不在の聞き手との関係を優先してテイルを付けて使う。いずれも聞き手の不在に基づいて、原則 (20) に従う。

最後に連体修飾について触れておく。坪本 (1993) は、写真キャプションなどに見られるル形の節と連体修飾の関係を論じている。次例は坪本 (1993:80) からの引用。

- (25) 最後の打者酒井を投ゴロに打ち取り、喜ぶ巨人宮本

(25) は、「、、、酒井を投ゴロに打ち取り、巨人宮本が喜ぶ」と節の形にしても同義のキャプションになる。(23) の節も、連体修飾の「横で立ち尽くす投手・上田」と同義に使える。坪本は、(23) のようなル形の節は「眼前描写」であり、(25) のように連体修飾にすると、「現場志向」的になり名詞句を焦点化する提示機能が加わるとする。

このようなル形の節とル形の連体修飾の間の書き換え関係では、動詞が形容詞的に使われており、この書き換えが成り立つ条件には原則 (20) が関わっている。

高橋 (1994) は、「門に向う道、哲学に関する表現」のように、連体修飾のル形が現在の状態を表す場合、当該のル形の動詞は動詞らしさを失っており、形容詞的に属性や関係を表す表現になると指摘している。高橋によれば、動きの意味のない動詞や動きのない状況を表す動詞が形容詞的に使える。例えば、連体修飾のル形で現在の状態を表す動詞は、「この道は門

に向う、その表現は哲学に關する」のように節で使っても現在の狀態を表し、「広い道」と「この道は広い」の両者で形容詞「広い」が同じ属性を表すのに類している。このような動きの意味がない動詞は、節と連体修飾で同形にして同義に使える点で、(25)のような写真キャプションのル形と共通する。

金水(1994:56)は、「学校に隣接した／隣接する地域、外交に關した／關係する事件」のように、存在や關係という狀態についての語義を持つ動詞には、ル形のままでタ形と等しく形容詞的に使えるものがあると指摘している。ただし、「私が關係した／關係する事業」のように、この種の動詞でも動作主が明示化されると、動詞に動きの意味が与えられて、ル形とタ形は過去と現在の対立を示すようになる。

高橋と金水はともに、節と連体修飾でル形が同義になる形容詞的用法の動詞では、狀態を表すものを扱う。しかし、形容詞的な働きの動詞は、動詞の語義や表された狀況に動きがなく、狀態を表すものに限られない。動きを表す動詞を使い、かつもとの狀況に時間の流れがあっても、写真キャプションのように時間を無化する文脈を作ると、その文脈からも形容詞的に使える動詞ができる。ここに原則(20)が關わる。

坪本の言う「現場志向」の表現は、話し手と聞き手が時空間を同じくする狀況の眼前描写でない点に注意しよう。写真は、現場に不在の聞き手に向け、あたかも聞き手が現場にいるかのように表す工夫であり、時間の流れがない。そのため、写真キャプションの動詞は原則(20)により動詞らしさの一つであるアスペクト形式を無化し、形容詞的用法に転じる。また、連体修飾のキャプションにすると、名詞句の文末への移動により、焦点化の意味が加わる。写真という文脈の重要性は、写真キャプションではル形の節がル形の連体修飾に書き換えられるが、このような節と連体修飾の書き換えは再現ビデオのように時間の流れがある文脈では生じないことから分かる。

## 5. おわりに

本論では、日本語の第四種動詞のル形用法に焦点を当て、ル形とテイル形がアスペクトとは別の原則で対立する事例を分析した。そのような事例は、聞き手が表された狀況を体験しうるか否かという観点から分析されると提案した。テイルの欠落としてのル形は、表された狀況に聞き手が不在であり、その狀況を聞き手が知識にすることはできても体験はしないことのサインをなす。このル形の用法は、話し手が聞き手に披瀝的に表現する工夫である。本論では、この用法を原則(20)により説明し、この原則が写真キャプションや連体修飾など他の事例にも応用できることを論じた。

アスペクトとは何かという抽象度の高い問題には、動詞の語義や文法的特徴、狀況の特徴などからさまざまな答がありうる。しかし、アスペクトは何について成り立つものかという

具体的な問題には、本論の議論から一つの明確な答が導き出せる。ル形とテイル形でアスペクトの違いがはっきりと出る例は、話し手と聞き手が同じ状況を直示的に指す場面での発話である。この発話の場面から外れると、ル形とテイル形がアスペクト的対立をなさなくなり、代わりに聞き手の在と不在を表すサインをなす。言い換えると、アスペクトは、話し手と聞き手が同じ時空間にいて、同じ状況についてコミュニケーションがなされる発話の場面について成り立つということである。

ル形とテイル形の意味の違いを分析するには、動詞のアスペクトに加え、話し手と聞き手の関係を考慮する必要がある。本論では特定の種類のル形とテイル形に集中したので、タ形や複合的な時間表現に議論が及ばず、連体修飾についても論じるべき点が多く残る。今後、これらの表現と聞き手の在と不在の関係について研究を進めたい。

\* 本論文は、2004年度日本語用論学会第7回大会において、「日本語の非状態動詞の状態指示用法について」と題して筆者が口頭発表した原稿を発展させたものである。論文の執筆にあたり、査読者の方々から有益な意見をいただいた。記して謝意を表したい。論文中の不備は全て筆者の責任である。

#### 参考文献

- Grice, H. P. 1975. "Logic and Conversation." In P. Cole and J.L. Morgan eds. *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*. 41-58. New York: Academic Press.
- 金田一春彦. 1950. 「国語動詞の一分類」『言語研究』15, 48-63.
- 金田一春彦. 1955. 「日本語動詞のテンスとアスペクト」『名古屋大学文学部研究論集 X 文学』4, 63-90.
- 金水敏. 1994. 「連体修飾の「～た」について」田窪行則 編『日本語の名詞修飾表現－言語学、日本語教育、機械翻訳の接点』29-65. 東京：くろしお出版.
- 久野暉. 1973. 『日本文法研究』東京：大修館.
- 益岡隆志・田窪行則. 1992. 『基礎日本語文法 改訂版』東京：くろしお出版.
- 仁田義雄. 1997. 『日本語文法研究序説－日本語の記述文法を目指して』東京：くろしお出版.
- 奥田靖雄. 1978. 「アスペクトの研究をめぐって（上）（下）」『教育国語』53, 33-44, 『教育国語』54, 14-27.
- Prince, E. F. 1992. "The ZPG Letter: Subjects, Definiteness, and Information-status." In W. C. Mann and S. A. Thompson eds. *Discourse Description: Diverse Linguistic Analyses of a Fund-raising Text*. 295-325. Amsterdam: John Benjamins.
- 高橋太郎. 1994. 『動詞の研究－動詞の動詞らしさの発展と消失』東京：むぎ書房.
- 田野村忠温. 1990. 『「のだ」の意味と用法－現代日本語の文法 I』大阪：和泉書院.
- 寺村秀夫. 1984. 『日本語のシンタクスと意味 第Ⅱ巻』東京：くろしお出版.
- 坪本篤朗. 1993. 「関係節と擬似修飾－状況と知覚」『日本語学』12巻2号, 76-87.
- Ward, G. and B. Birner. 1995. "Definiteness and the English Existential." *Language* 71, 722-42.
- 吉川武時. 1976. 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」金田一春彦 編『日本語動詞のアスペクト』155-327. 東京：むぎ書房.

用例出典 (引用順) ( ) 内は論文の中で使った略称

(地名) : 『日本地名大辞典 3 岩手県』 pp.353-54. 角川書店. 1985./ (美術) : 『日本の美術 458』 p.9. 至文堂. 2004/7/15./ (現代) : 『週刊現代』 p.11. 講談社. 2004/7/3./ (東京) : 『東京の戦前: 昔恋しい散歩地図』 p.92. 草思社. アイランズ 編. 2004./ (人名) : 『日本人名大辞典』 p.594, p.1546. 講談社. 2001./ 小樽 : 『小樽の建築探訪』 p.70. 北海道新聞社. 小樽再生フォーラム 編. 1995./ 河北 : 『河北新報』 18 面. 2005/3/28. (pp.7-8 「小樽の建築探訪」の写真と解説文の一部、および pp.10-11 「河北新報」の写真とそのキャプションについてはそれぞれ小樽再生フォーラムと河北新報より掲載許可取得済み)